

## 日本の中国侵略と水野梅暁

広中 一成

### はじめに

日本の中国侵略と日本仏教の戦争協力に関する研究は、近年の日中戦争史研究のなかで、注目を集めている。

戦後しばらく、日本仏教界は自らの戦争協力の事実を表沙汰にしなかった。しかし、1970年代に入ると、市川白弦と中濃教篤の研究によって、日本仏教の戦時下での様相について明らかにされるようになった<sup>(1)</sup>。

1990年代になると、小島勝と木場明志が浄土真宗大谷派の海外開教との関係から考察し、槻木瑞生は教育史の視点<sup>(2)</sup>から、日中戦争下の大陸布教の実態について論じた。

2000年代頃からは欧米や中国でも研究が進展した。たとえば、ブライアン・ヴィクトリアは、禅宗が軍国主義と結びつき、戦争協力の一端を担うまでを考察<sup>(3)</sup>し、愚学は日本人僧侶らが教義を解釈し直しながら、いかに戦争協力を正当化していったのか論じた<sup>(4)</sup>。

以上のような研究とともに一次史料の調査も精力的に行われ、その成果をもとに近年はより実証的な研究成果が発表された。たとえば、新野和暢は日中戦争下の日本人僧侶による大陸布教の実態を通して、仏教が戦争に協力していく思想的背景を探った<sup>(5)</sup>。

(1) 末木文美士・辻村志のぶ「戦争と仏教」、末木文美士編『新アジア仏教史14 日本IV 近代国家と仏教』、佼成出版社、2011年、225頁。

(2) 槻木瑞生「大陸布教と教育活動—日中戦争下の日語学校覚書」、『同朋大学論叢』第64・65号、同朋学会、1991年6月、295～314頁。

(3) ブライアン・アンドルー・ヴィクトリア著・エイミー・ルーズ・ツジモト訳『禅と戦争』、光人社、2001年。

(4) Xue Yu Buddhism, War, and Nationalism, Chinese Monks in the Struggle against Japanese Aggressions, 1931-1945, Routledge, 2005.

(5) 新野和暢『皇道仏教と大陸布教—十五年戦争期の宗教と国家』、社会評論社、2014年。

このように研究が進むなか、その歴史的評価をめぐって今も議論が続いている人物がいる。それが本稿で取り上げる水野梅暁である。水野は曹洞宗僧侶で、1920年代から1940年代にかけて中国問題のジャーナリストとして活躍した。

水野は1904年に東亜同文書院を第一期生として卒業した後、日中間を行き来しながら、両国の仏教交流に力を注いだ。そして、1925年には、東京で日中の仏教関係者を招いて開催された東亜仏教大会を成功に導いた。『東亜同文書院大学百年史』では、「学僧・日中友好の先駆者」と題して、日中仏教交流に果たした水野の役割を評価した<sup>(6)</sup>。

一方、1931年9月に満洲事変が勃発すると、水野は日本軍の戦争行動を支持する論説をいくつも発表した。さらに、1933年には日満文化交流を促進するため、日満文化協会を設立し、その理事に就任した。この水野の行動について、柴田幹夫は「水野梅暁の功績をどのように捉えるかは、今の段階では難しいことであるが、僧衣の下に鎧を着けた人物であるということだけは言えるであろう」<sup>(7)</sup>と評した。

なぜ水野は日中仏教交流を成功させたあと、まるでそれを打ち壊すかのように、日本の中国侵略を支持したのか。栗田尚弥によると、もともと、水野のアジア観の根底には、「中国を中国たらしめているもの、日本を日本たらしめているもの、さらにはアジアをアジアたらしめているものは、中国なり日本なりのそしてアジアなりの文化」<sup>(8)</sup>があるという認識があった。そして、「彼はアジア諸国家が、互いに交流・協力してそれぞれの文化的アイデンティティーを守り、さらに「東方文化」の「向上発揚」を図ることこそが、アジアの独立・安全に繋がると考えた」<sup>(9)</sup>。栗田はこの水野の考えを「一種の文化防衛論」<sup>(10)</sup>と名づけた。

さらに、栗田によると、水野が文化防衛論の立場からもっとも恐れたの

---

(6) 「学僧・日中友好の先駆者 水野梅暁(1)」、大学史編纂委員会編『東亜同文書院大学史—創立八十周年記念誌—』、滙友会、1984年、370～371頁。

(7) 柴田幹夫「水野梅暁と日満文化協会」、『仏教史研究』第38号、龍谷大学仏教史研究会、2001年10月、69頁。

(8) 栗田尚弥『上海 東亜同文書院一日中を架けんとした男たち—』、新人物往来社、1993年、129頁。

(9) 同上、129～130頁。

(10) 同上、130頁。

は中国国内の混乱に乗じて「欧米列強がさらには新興勢力・ソ連が中国のアイデンティティーたるその文化を蹂躪することであった」<sup>(11)</sup>。そして、中国と共通した文化を持つ日本は、「中国の「混乱」を收拾し、英米帝国主義国家とソ連の手から「東方民族を解放」しなければならない」<sup>(12)</sup>と述べ、日本の中国侵略を正当化した。

この栗田の考察からは次の三点の疑問が残る。一点目は水野が守ろうとした「中国のアイデンティティーたるその文化」とは具体的に何を指したのか。二点目は水野がいつ頃から中国文化を脅かす欧米列強に警戒感を抱くようになったのか。三点目は水野が列強から中国文化を守るため、日本の中国侵略を正当化したが、それと日満の文化交流とはいかなる関係があったのかである。

本稿では栗田の研究成果に依拠しつつ、以上の疑問を検討し、水野がなぜ日本の中国侵略を支持したのかという問題を考察していく。

## I 水野と中国文化

### 1 水野とふたりの師

本章では、水野が守ろうとした「中国のアイデンティティーたるその文化」とは、具体的に何を指したのかを検討する。

まず、議論の前提として、水野の人物像を文化の視点からみていく。この問題を検討する手がかりとして、水野と生前に交流のあった松田江畔が記した次の一文を取り上げる。「数年祖厚師の膝下は侍した梅暁先生はその教えを生涯奉じて誤らなかつた。祖厚師あつて梅暁師が成立し、根津山洲先生あつて梅暁師の進退があつたかに考えられる」<sup>(13)</sup>。

「祖厚師」とは京都紫野にある臨濟宗大徳寺高桐院の高見祖厚居士<sup>(14)</sup>のことで、「根津山洲先生」とは、東亜同文書院初代院長の根津一のことをいう。では、このふたりと水野とはいかなる関係にあったのか。

(11) 同上、137頁。

(12) 同上、137～138頁。

(13) 「編者メモ」、松田江畔編『水野梅暁追懐録』、私家版、1974年、136頁。

(14) 「水野梅暁師略歴」、同上、5頁。

水野は1877年1月、旧福山藩士金谷俊三の四男として、広島県深安郡福山町（現在の福山市）で生まれた。7歳のときに縁戚にあたる曹洞宗長善寺住職、水野桂巖の養子となり、その後、出家した<sup>(15)</sup>。

水野と高見との出会いは、水野が小学校卒業後、雲水修行のため、桂巖の紹介状を携えて高桐院を訪れたときであった<sup>(16)</sup>。高見<sup>(17)</sup>は本名を愿といい、号を林泉、または廣川と称した。生家は熊本藩家老に次ぐ家格を持っていた。

高見は同じ熊本藩出身で、明治政府で文部大臣などを務めた井上毅と親交があり、それが縁で宮内省に勤務した。その後辞職し、高桐院内に自在庵という庵を設けて修禅に入った。

高見は禅学だけでなく、漢学、国学、和歌にも精通し、教え子には元京都帝国大学総長の木下広次や衆議院議員の佐々友房、アジア主義者の杉山茂丸らがいた。

高見と親交のあった森田清之助によると、高見が毎週日曜日に自在庵で開いていた儒学の講座では、四書のなかの『論語』、『中庸』、『大学』を用いた講義が繰り返し行われた。高見の門弟には儒者から書家、和歌を志す者までいたが、その中でも水野は、同じく弟子で僧侶の富永成圓<sup>(18)</sup>とともに、「二師前後師に隨身し情父子の如し」<sup>(19)</sup>と称されるほど、高見にかわいがられた。

この頃の水野の評判について、森田は次のように述べている。「水野梅暁師は備後の人気宇闔達、非凡の怪僧で弁舌縦横其心底、及抱懐は容易に解し難く或人は師を以て魔物とさへ称してゐる」<sup>(20)</sup>。

一方、水野の進退を決めた根津一との関係はどのようにして始まったのか。日清戦争が起きた1894年、水野は高見のもとを離れて上京し、東洋

---

(15) 前掲「水野梅暁と日満文化協会」、『仏教史研究』第38号、47頁。

(16) 前掲「学僧・日中友好の先駆者 水野梅暁(1)」、『東亜同文書院大学史』、370頁。

(17) 以下、高見の略歴については、「自在庵主 高見祖厚師 附 奇僧 水野梅暁師」、森田清之助編『光悦談叢』、芸艸堂、1920年、45～46頁を参照。

(18) 森田によると、富永は「自在庵の顔回」とまで称された僧侶であったが、短命に終わった（同上、46頁）。

(19) 同上、46頁。

(20) 同上、46頁。

大学の前身である哲学館の夜学で学んだ<sup>(21)</sup>。その後、再び京都で修行に入った水野は、1897年春、参禅中の根津と出会った。

根津<sup>(22)</sup>は1860年5月2日、根津勝七の次男として甲斐国山梨郡日川村に生まれた。幼名を伝次郎といい、山洲を号とした。根津家の祖先は甲州武田家に仕え、江戸時代は代々名主を務めた。

根津は幼い頃から勉学を好み、漢籍を涉猟した。とくに、四書の『大学』はひとときも手から離すことがなかった。

1877年、陸軍に進んだ根津は、一期下の荒尾精と中国で東亜交流の事業に邁進することを誓い合い、1890年、陸軍省の許可を得て上海に渡り、荒尾が建てた日清貿易研究所の代理所長に就任した。

日清戦争後の1895年、陸軍を離れた根津は、荒尾の住まいのあった京都若王子に移って、参禅に入った。唐代に中国で確立された禅は、個人の安心立命を求めて座禅を組むことを目的とした。心の修養に眼目を置く禅は、明末になると、「心即理」を唱える陽明学と結びつき、発展を遂げた<sup>(23)</sup>。明治時代以降、日本では武士道精神の発揚の手段として軍人の中で愛好された。たとえば、日露戦争で活躍した乃木希典は、臨濟宗の南天棒の弟子になって禅修行に励んでいた<sup>(24)</sup>。

根津が禅修行を始めた目的はいったい何だったのか。水野によると、根津は東アジアが欧米勢力の進出で危機に迫るなか、「斯道を根帯とする日支両国の道誼的連鎖を造るには、飽迄も王道を以て之に進まざる可らず」と考え<sup>(25)</sup>、王道を身につけるためには、儒教を学ぶとともに、「参禅の力に依りて自性の本体に透徹し、其本体より発する良心の機能」<sup>(26)</sup>を発揮することが重要であると説いていた。

王道とは、四書のひとつ『孟子』にみられることばで、侵略主義または帝国主義の概念を持つ霸道と相反し、儒教でもっとも重要視された仁義を

---

(21) 前掲「学僧・日中友好の先駆者 水野梅暁(1)」、『東亜同文書院大学史』、370頁。

(22) 以下、根津の略歴については、前掲『上海 東亜同文書院』、40～64頁を参照。

(23) 小島毅『朱子学と陽明学』、筑摩書房、2013年、166～170頁。

(24) 前掲『禅と戦争』、153頁。

(25) 仰止生「精進院根津一先生」、『支那時報』第4巻第1号、支那時報社、1926年1月、108頁。

仰止生是水野のペンネーム。

(26) 同上、108～109頁。

用いて天下を支配するという考え方をいう<sup>(27)</sup>。

参禅中の根津と出会った水野は、「端厳にして慈祥なる先生は、渺たる不肖の如き一青年に対しても、尚且諄々として告誡し、終に斯道の為に一身を捧げんとするの信念を培養せられ<sup>(28)</sup>、以後、「根津と水野は一心同体だ。真に根津を継承した者は水野より外はない<sup>(29)</sup>」と評されるほど、両者は固い師弟関係で結ばれた。

水野が師と仰いだ高見と根津に共通したのが、中国文化を代表する禅と儒教に精通していたということであった。水野もふたりと接するなかで、禅と儒教について知識を得たと考えられる。

中国文化に関する水野の博学ぶりを示したエピソードがある。1901年、東亜同文書院院長に任命された根津の書生として上海に渡った水野は、書院で門番や図書館員として働くかわら、語学や中国古典の研究に没頭した<sup>(30)</sup>。水野の仏教の知識とその風貌はたちまち書院生たちの心を捉え、率先して水野から仏教の聖典について講義を受ける学生まで現れた。そのなかのひとりの井坂秀雄は、水野から道教関係の研究書の筆写を依頼され、漢字やアラビア文字が並ぶ原典を前に、難解な研究をしていた水野の学識の深さと熱意に舌をまいたという<sup>(31)</sup>。

このように、中国文化に対する深い知識を持っていた水野の言う「中国のアイデンティティたる文化」とはいったい何であったのか。何をきっかけに水野はそれを認識するようになったのか。

## 2 欧米列強の中国文化への侵略

1902年8月、水野は曹洞宗の開祖道元が修行したことで知られた浙江省寧波の普陀山天童寺を訪れた<sup>(32)</sup>。そして、1903年からは根津のもとを離れて、湖南省長沙に活動の拠点を移した<sup>(33)</sup>。

---

(27) 竹内照夫『四書五経入門』、平凡社、2014年、253～257頁。

(28) 前掲『精進院根津一先生』、『支那時報』第4巻第1号、100頁。

(29) 前掲『編者メモ』、『水野梅暁追懐録』、138頁。

(30) 同上、138頁。

(31) 前掲『学僧・日中友好の先駆者 水野梅暁(1)』、『東亜同文書院大学史』、370頁。

(32) 『天童参拝日記』、高田道見編『天童小誌』、仏教館、1902年、33～63頁。

(33) 前掲『編者メモ』、『水野梅暁追懐録』、138頁。

1904年、根津の計らいで東亜同文書院を第一期生として卒業した水野は<sup>(34)</sup>、1905年、長沙にあった当時中国最高の禅寺といわれた開福寺に僧学堂を設け、曹洞宗開教師として活動するかたわら、学僧たちを集めて日本語や教典の講義を行なった<sup>(35)</sup>。また、水野は仏教を信仰する知識人や僧侶との交流も活発に行い、その過程で黄興ら革命派人士と繋がりを持った<sup>(36)</sup>。

水野が日中の民間から寄付を募って長沙に建設した雲鶴軒<sup>(37)</sup>は、日中文化親善の場所となり、大谷光瑞ら日本からも多くの人々が訪れた。大谷は僧学堂の経営を支援するなど、水野の活動を支えた<sup>(38)</sup>。

そもそも、水野が修行の地に選んだ湖南省は、「一旦之を信ずる時に於ては、其又容易に転ぜざるは当然」という質実剛健な気風があり、「唐朝以来相依り相安じ来れる仏教に対する信仰も亦之を推知するに難からざる」<sup>(39)</sup>と、仏教信仰が篤い土地柄であった。

このような場所で、水野が布教活動や学僧の教育、日中文化親善に力を注いだのはなぜか。水野によると、1901年の北清事変で日本軍が清蔵といわれた一切経（大藏経）の版木を戦火から守ったことに対し、中国人仏教徒が「弥々我国に依らんとするの情を増したるの結果、若し此仏教をして社会の一角に頭を擡げしめんには、日本仏教と接近して日本の文明を僧侶の手より輸入し以て内自ら安し外、社会の侮蔑を免れんと<sup>ツマ</sup>の意を有しつゝあるを以て我邦布教及教育には、再び得易からざるの最好期にあるが如し」<sup>(40)</sup>と考えたからであった。

水野にとって、長沙で開教師として活動した経験は、仏教が中国のアイデンティティを形成するひとつの文化であることを肌身で知る機会となったのではないだろうか。

その一方で、水野は布教権問題をめぐって、日本仏教が中国での活動に

(34) 同上、138頁。

(35) 前掲「学僧・日中友好の先駆者 水野梅暁(1)」、『東亜同文書院大学史』、370頁。

(36) 山本勇吉「雁魚」、前掲『水野梅暁追懐録』、75頁。

(37) 同上、75頁。

(38) 前掲「編者メモ」、『水野梅暁追懐録』、139頁。

(39) 水野梅暁「湖南仏教視察報告」、安井正太郎編著『湖南』、博文館、1905年、618頁。

(40) 同上、616頁。

大きな制約を受けていることを知った。

布教権とは、第二次アヘン戦争後の1860年10月、清国と英仏両国が結んだ北京条約により認められた権利で、これまで開港場内に限られていたキリスト教宣教師の布教活動が、開港場以外でも正式に行えるようになった。また、この権利は英仏だけでなく、清国から最恵国待遇を受けていた国々にも与えられた<sup>(41)</sup>。しかし、北京条約と係わりのない日本には布教権が認められなかった。

布教権が認められたことで、キリスト教宣教師は中国内部に入って教会や礼拝堂を作り、そこを拠点に布教活動を展開した。その活動の広がりはいくらのものであったのか。たとえば、プロテスタントの布教組織である伝道会は、布教権が認められる前は中国全体に35ヶ所あったが、布教権獲得後の1900年には、その15倍近くに達する498ヶ所にまで激増した<sup>(42)</sup>。

一方、最恵国待遇がなかったため、中国での布教権を認められなかった日本仏教は、1876年に浄土真宗大谷派が谷了然や小栗栖香頂ら6人の開教師を上海に派遣して、中国での活動拠点として上海別院を創設したばかりであった<sup>(43)</sup>。

辛亥革命が起きているさなかの1911年12月27日、水野は「対支那伝導政策」を書き上げ、布教権に対する自身の考えをまとめた。このなかで水野は、日本の仏教徒が欧米の宣教師と比べて中国での布教活動に後れを取っているのは布教権に原因があり、日本仏教が中国で布教権を獲得することにより、「少くとも欧米宣教師と同一の立脚点に立ちて乱後の大陸に向って高尚なる人道主義の神聖なる吾人の事業に声援を与へ国民的親善の先駆者たらしむる」<sup>(44)</sup>ことができると述べた。

そして、今後日本仏教が布教権を獲得するためには、「僧侶自身の努力と信念との外、更に民国政府者の意思と日本の社会及当路者の慫慂とに待

---

(41) 姫田光義・阿部治平・笠原十九司・小島淑男・高橋孝助・前田利昭編『中国近現代史 上巻』、東京大学出版会、1983年、37～38頁。

(42) 呉利明・鄭児玉・関庚培・土肥昭夫『アジア・キリスト教史(1)―中国、台湾、韓国、日本―』、教文館、1995年(第4版)、27頁。

(43) 蕭平『近代中国仏教的復興』、広東人民出版社、2003年、67～68頁。

(44) 中村義「水野梅曉在清日記」、『辛亥革命研究』第6号、辛亥革命研究会、1986年、122頁。



たざる可らず」<sup>(45)</sup>、さらに、日本仏教徒が中国仏教の歩んできた道を振り返り、中国にある文物と日本社会との関係を斟酌すれば、中国仏教に対する同情が生まれ、「かくして日本仏教徒の好意は自ら支那国民に感激するの暁は民国政府者たるもの豈に不条理なる清国政府の故轍を踏んで日本仏教徒のみを虐待せんや」<sup>(46)</sup>と、革命派に期待を寄せた。

辛亥革命で水野は、戦場に臨時野戦病院を開設し、敵味方問わず死傷者を収容したり<sup>(47)</sup>、布教権問題を話し合うため、黄興<sup>(48)</sup>や宋教仁<sup>(49)</sup>と会見に臨んだりするなど、このときすでに布教権獲得に向けた行動を始めていた。

これら経緯から、辛亥革命での水野の行動を分析した栗田は、水野の目的が革命派の支援以外に、日本仏教徒の中国での権利拡大にあったと論じた<sup>(50)</sup>。ここではさらに「文化防衛論」の視点から、なぜ水野が布教権を問題視したのか考える。

1915年7月、水野は布教権問題を広く日本社会に訴えるため、『支那に於ける欧米の伝道政策』を発表した。このなかで水野は、近代以降、布教権は「人類一般が享有せる相互的特権」<sup>(51)</sup>となったが、北京条約により、「支那に対する列強の布教権は、弾力稀薄なる布教権より強烈なる布教権に進んだ」<sup>(52)</sup>と述べた。

さらに、水野はキリスト教宣教師の布教により、中国で太平天国の乱やキリスト教排斥運動が発生したことを指摘するとともに、宣教師と信徒らが、中国人のもっとも重んじていた祭祀と神仏を軽侮したこと、中国人の信じていた風水を無視して、高い建物を建てたこと、中国人が恥とした男女同席を無視して、男女が一緒になって教会に入ったこと、両親からもらった自らの体を傷つけないという中国の道徳を無視して、教会付属の病院で

(45) 同上、124頁。

(46) 同上、124頁。

(47) 同上、106頁。

(48) 同上、110頁。

(49) 同上、113頁。

(50) 前掲『上海 東亜同文書院』、134頁。

(51) 水野梅暁『支那に於ける欧米の伝道政策』、仏教徒有志大会、1915年、11頁。

(52) 同上、11頁。

外科手術を行なったことなどを厳しく非難した<sup>(53)</sup>。

水野が問題視したのは、布教権によってキリスト教の影響が中国内地まで広がることにより、仏教だけでなく、中国のアイデンティティを形成していた儒教的、道徳的伝統文化にも深刻な被害が及ぶことであった。水野が布教権問題を問題視した背景には、中国文化の置かれた現状に対する強い危機感があった。

ところで、キリスト教による中国文化の破壊に危惧の念を抱いていたのは、水野だけであったのだろうか。

1902年に水野と天童寺で出会った以来、親交を深めていた太虚は、中国仏教界の若手改革派のひとりとして頭角を現し、若手僧侶の教育や仏教専門雑誌『海潮音』による布教活動に力を注いだ。

1922年、太虚は浄土宗の聖地とされた江西省廬山を訪れた際、山上が欧米人の避暑地とされ、教会や運動場などが建設されていることを目の当たりにした。中国仏教の危機を悟った太虚は、山上に「世界仏教聯合大会」の看板を掲げて欧米人宣教師に仏教講話を始めた。そして、このときまた廬山を訪問した九江駐在日本領事の江戸千太郎に日中両仏教の連携と講師の派遣を要請した<sup>(54)</sup>。

これをきっかけに、日中両仏教界は長く途絶えていた交流を再開し、1925年11月、太虚ら中国仏教界代表を日本に招いて、東亜仏教大会を開催した。このとき、水野は大会委員として、中国側出席者との連絡役を務めた<sup>(55)</sup>。

## II 中国に対する不満と満洲事変の支持

### 1 満洲事変への支持表明

布教権問題を通して中国文化の危機を訴え、さらに東亜仏教大会の開催に尽力した水野が、その後、なぜ中国文化の破壊に繋がるおそれのある日本の中国侵略を支持するようになったのか。その手がかりをつかむため、

---

(53) 同上、19～20頁。

(54) 水野梅暁『支那仏教の現状に就て』、支那時報社、1926年、89～91頁。

(55) 峯玄光編『東亜仏教大会紀要』、仏教聯合会、1926年、22～23頁。

少々引用が長くなるが、満洲事変の発生から約3ヶ月後の1931年12月21日、『支那時報』第16巻第1号に水野が掲載した評論「支那時局解説」を取り上げる。なお、『支那時報』とは、水野が社長となって1924年10月に創刊した中国問題専門の雑誌である。

「想ふに今回の事変は、帝国政府は屢々声明せるが如く、在満邦人の生命財産の保護と、並に同地方に於ける我国の權益擁護にあることは勿論なるも、満洲に於ける邦人の生命財産の安全を保持し、權益を擁護せんとするには満洲自体の安全其の物を保持せざれば、如何にしても其の目的を達し得るものに非ざるは則ち自明の理である。(引用者略)

故に吾人はかくして、權益擁護を目標として行動したる我軍の活動が、端くも満洲三千万の民衆を水火の中より救ふて、暴戾なる旧軍閥の極端なる苛斂誅求より免れしめ、延いて彼等は生来始めて見るの安全地帯にありて、撃壊鼓腹の樂を得せしむることとすればその結果に於て我軍の行動は、我が同胞を救ひ我權益を擁護したる副産物として、王者が天に代つて民を吊する仁義の師とするものである。(引用者略)今の支那は、所謂共産党と称するパンの強奪を目的とする暴民の一団の外に、所謂党国と称して一党専制の政治を行ひたる国民党とに累せられて、一般の人民は水深火熱の中に呻吟して居るが、此の共産党は其の数に於ては如何に多数なりとしても、政治さへレールの上に上れば自然に解消せられて、其の業を業とする良民に化するものなれば、敢て意とするに足らざるも、其の政治をレールの上に上すべき国民党が、最早過去五年間に於ける成績に依りて、其の任に非らざることを暴露したれば、全支の識者は満洲に於ける我軍の行動を括目しつゝあれば、我軍が最も公平に安全地帯の見本を示せば、河北河南は勿論、全支が之に従ふことは期して待つべきである」(下線は引用者)<sup>(56)</sup>

この評論の内容から推察するに、水野が日本の中国侵略のきっかけとなった満洲事変に賛意を示した理由は、大きく分けて、満蒙權益の擁護、中国民衆を苦しめた旧軍閥、特に満洲を拠点とした奉天軍閥に対する批判、中国に政治的混乱を招いた中国国民党に対する批判の3点であった。なぜ、水野はこれら考えを抱くようになったのか検討していく。

(56) 水野梅暁「支那時局解説」、1931年12月21日執筆、『支那時報』第16巻第1号、支那時報社、1932年1月、7～8頁。

## 2 満蒙權益の擁護

満蒙とは満洲といわれた現在の東北三省と東部内蒙古一帯をいう。日露戦争に勝利した日本は、1905年9月、ロシアと結んだポーツマス条約により、満洲にあったロシアの利権のうち、遼東半島の租借権と、長春から旅順までの鉄道に係わる権利を手に入れた。さらに、1912年に締結された第三次日露協約で、東部内蒙古が日本の勢力範囲であることをロシアに認めさせた。

第三次日露協約が成立した翌年の1913年9月12日、水野は対露強硬派として知られた衆議院議員の小川平吉に宛てて、「護国論」と題する日本の対中政策に関する書簡を送った。

このなかで水野は、列強が中華民国の袁世凱政権を利用して、中国から新たな權益を手に入れている現状に批判を加えたうえで、「独り列強ヲシテ我眼前ニ威福ヲ逞フセシメテ日本独り之ニ指ヲ染メズンバ、有史以来全甌無欠ノ帝国ノ地位ヲ安全ニ守護シ中興ノ偉業未ダ成ラザル今日ノ国力ヲ充分ニ増進セシメ得ルノ方法何処ニカル」<sup>(57)</sup>と、列強に対抗するために、日本も中国で新しい利権を獲得していく必要があると述べた。そして、その具体的方法として、水野は旧清朝皇族の肅親王を押し立てて満蒙を独立させ、彼らと日露協約にならった条約を結び、満蒙のすべての利権を日本のものとすることや、1913年に起きた南京事件の賠償として、南京近郊の浦口に一大専管居留地を設けることを提案した<sup>(58)</sup>。

さらに、1916年1月、水野は「支那刻下の動乱と列国の利害関係」と題する論文のなかで、「日本の今日の地位と実力を以て、支那に対して利権を獲得せんと欲すれば何事でも出来ない事はない。例へば満蒙は当然我が国で保護するといつて兵を出して固めて仕舞へば、支那では何うすることも出来るものではない」<sup>(59)</sup>と述べて、満蒙權益の確保を目的とした出兵を提案した。

しかし、その一方で、水野は同じ論文内で、日中「両国民が動もすれば

---

(57) 水野梅暁「護国論」、1913年9月12日執筆、小川平吉文書研究会編『小川平吉関係文書2』、みすず書房、1973年、73頁。

(58) 同上、73頁。

(59) 水野梅暁「支那刻下の動乱と列国の利害関係」、『欧洲戦争実記』第51号、博文館、1916年1月、68頁。

融和を欠ける理由は如何と云ふに、今日迄日本は支那に対して余りに特殊の利権を貪り過ぎた傾きがある。即ち二言目には直ぐに支那の苦痛を感じ様な要求を提出して、彼等を苦しめた結果である」<sup>(60)</sup>とも述べた。これは、前年の対華二十一ヶ条要求に対する中国民衆の反発を受けた意見であると思われる。

なぜ、水野は満蒙権益の確保を強く訴え続けたのだろうか。考えられる点のひとつに、水野と「一心同体」の関係といわれた根津一が存在がある。

日露開戦前、根津は「対露主戦論」を執筆し、日本軍当局に提言した。このなかで根津は、日露戦争で日本がロシアに勝利した場合、満洲は清国に返還すべきだとする日本の一部世論を批判したうえで、「今戦勝の余事に乗じて満洲に特権の統治策を施し、其の門戸を開放して、五方雜処中外互益の境と為し、戦利に属する満洲鐵路は朝鮮の京義線に連結して各国の経済的利便に供し、我が同胞の手を以て学校を興し、教育を進め、産業を勧め、武備を修め、良疆土となして以て露人南侵の路を途絶せば、名は清国の領有に沿ると雖も、実は我が邦の外府に異ならず」<sup>(61)</sup>と述べて、満洲権益を確保すると同時に、日本の手で満洲を振興し、ロシアの南下を防ぐ必要があると説いた。この論文は日露戦争後、漢訳されて清国の大官や各地の官僚、および中国各地の中学以上の学校や各商工会議所に配布された<sup>(62)</sup>。

水野がこの論文を直接目にしたのかどうかは定かでないが、根津に深く傾倒するなかで、満洲の権益に対する根津の考えに少なからず影響を受けたのではないだろうか。

### 3 奉天軍閥に対する批判

中華民国が成立すると、中国国内は軍閥同士による激しい戦乱が繰り返された。そのなかで、日本は奉天軍閥の張作霖を支援することで、満洲を事実上の独立の状態に置き、満蒙権益を確保した。<sup>(63)</sup>

---

(60) 同上、66頁。

(61) 根津一「対露主戦論」、東亜同文書院滬友同窓会編『伝記叢書243 山洲根津先生伝』、大空社、1997年、309頁。

(62) 同上、311頁。

(63) 中村隆英『昭和史(上)』、東洋経済新報社、2012年、100頁。

張作霖は1920年の安直戦争で袁世凱の後継者であった段祺瑞率いる安徽軍閥を破って、北京政府を支配したが、1922年4月の第一次奉直戦争で直隸軍閥に敗れて奉天へ引き返した。しかし、1924年9月、直隸軍閥と安徽軍閥が上海周辺で衝突すると、混乱に乗じて、張作霖は17万人の兵力で直隸軍閥に戦いを挑み、直隸軍の馮玉祥のクーデターもあって、ふたたび北京に進出を果たした<sup>(64)</sup>。

滿蒙權益に関心を持っていた水野は、日本の影響下で滿洲や北京政府を支配していた張作霖や奉天軍閥をどのように見ていたのか。

水野は辛亥革命以来、革命派の支援に奔走していたが、革命派を弾圧した袁世凱が1916年に亡くなり、北京政府で陸軍総長を務めていた段祺瑞が後継者となると、段を中国の混乱を收拾できる人物であると評価した<sup>(65)</sup>。

その一方で、水野は北伐戦争のさなかの1927年6月26日に執筆した「大局上より張氏の下野を高調す」のなかで、奉天軍閥が国民革命軍に敗れて「張氏が一朝にして北京を退却せし場合は、滿洲の治安は必ず脅かざるものなれば、我国は滿洲に於ける治安を維持して、我在留十万の同胞を保護し、其の在滿の経済的施設を保維する上より云ふも、前後数回に亘る弄火犯人にも等しき張氏の帰奉は、我国々民の名に於て、断然之を拒否すべきものである」<sup>(66)</sup>と述べて、段祺瑞から政權の座を奪って、再び中国を混乱させた奉天軍閥が滿洲に戻ってくることを強く反対した。

さらに、「張氏が朝に奉天に帰れば、夕には必ず討張軍が滿洲に侵入するは、智者を俟ずして知るべきものなれば、吾人は我国の特殊なる利益を保護する外に支那の為に謀るも、我国は当然之を拒否すべきものであつて、之は敢て支那の内政に干渉せんとするものにもあらず、又張氏個人を眼の上の瘤として之を厭ふにもあらずして、只我国の特殊地域の安全を期せんとする、事実其の物より発露する正当なる行動であると信ずる次第である」<sup>(67)</sup>と、奉天軍閥を追って国民革命軍が滿洲に侵攻してくることに反

---

(64) 横山宏章『中華民国』中央公論社、1997年、72～74頁。

(65) 前掲『上海 東亜同文書院』、135頁。

(66) 水野梅曉「大局上より張氏の下野を高調す」、1927年6月26日執筆、『支那時報』第7巻第1号、支那時報社、1927年7月、6頁。

(67) 同上、6頁。

対し、満蒙權益を守るだけでなく中国のためにも、日本は断乎とした態度で臨むよう訴えた。

#### 4 中国国民党の統治に対する批判

1912年1月に中華民国が成立して以後も、水野は革命派の支援を続けた。たとえば、1913年9月、袁世凱政権の打倒を目指して行われた第二革命が失敗に終わり、革命派が日本に亡命してくると、水野は東京大森にあった浩然廬に彼らを潜ませた。浩然廬は革命派が設けた軍事教育機関で、第二革命に参加した元江西都督の李烈鈞の要請を受けて、予備役騎兵大尉の青柳勝敏が指導にあたっていた<sup>(68)</sup>。

また、袁世凱政権が日本政府に対し、亡命中の張継、殷汝耕、戴季陶の引き渡しを求めると、水野は住友商事総理事の鈴木馬左也らを介して、当時検事総長を務めていた平沼騏一郎に3人の身柄を拘束しないよう働きかけた<sup>(69)</sup>。

これら革命派人士との深い交流が買われ、1921年、水野は外務省の対中国宣伝機関であった東方通信社の調査部長に抜擢された。さらに、1924年、水野は支那時報社を設立して社長に就任し、調査部長のときに発行していた月刊誌『支那時事』を引き継ぐ形で、10月、『支那時報』を創刊した。

この年の1月、中国国民党は広州で第一回全国代表大会を開催し、かねてよりコミンテルンと中国共産党とで話し合われていた国共合作(第一次)が正式に成立した。これにより、毛沢東ら中国共産党員らも新たに国民党中央執行委員に選ばれた。さらに、国共合作により、中国革命の基本理念であった三民主義を帝国主義と軍閥の打倒、農民と労働者の解放をうたった新三民主義に改められた<sup>(70)</sup>。

そして、同年9月に北京政府の権力争いから第二次奉直戦争が起こると、孫文は直隸軍閥討伐の軍を興すと宣言した<sup>(71)</sup>。

このような中国の情勢を受けて、水野は『支那時報』第1号の「時事評

---

(68) 海原宏文「水野梅暁師と私」、前掲『水野梅暁追懐録』、40頁。

(69) 太田外世雄「水野梅暁師への思い出」、同上、19～20頁。

(70) 前掲『中国近現代史 上巻』、295頁。

(71) 同上、296頁。

論」を執筆し、「吾人は予て『支那の事は支那人に解決せしむべし』との方針に基づき、敢て支那人以上に支那の事を過慮すべき性質のものに非ず」<sup>(72)</sup>と述べて、中国の問題については、中国人の自決に任せるべきであると述べた。

また、1925年5月30日、上海で中国共産党の呼びかけに応じた労働者や民衆が反帝国主義を掲げたデモを起し、その後、上海のほか、外国企業の集中する香港や広州で労働者のストライキが発生したときも<sup>(73)</sup>、水野は『支那時報』上で日本政府と日本の官民に自制を求める記事を掲載した<sup>(74)</sup>。

しかし、1926年10月23日、上海で中国共産党と中国国民党上海党部の指導のもと、労働者が暴動を起こすと<sup>(75)</sup>、これまでの不干渉の態度を改め、11月、水野は孫文の後を継いで国民党の指導者となった蒋介石に向けて、国民党右派の考えとして次のように述べ、ソ連ならびに中国共産党への対応について批判した。

「蔣氏にして果して国を救はんと欲すれば、飽く迄も中華民國の国民の上に立脚すべきものである。然るに蔣氏が此大義を洞察せず、依然として世界革命を標榜する露国と提携しつゝあることは、吾人の断じて与せざる所なりと前提し、更に抑々我等国民党の革命は、孫中山先生の革命であつて、其革命は中華国内の革命である。(引用者略) 故に吾人は、今少しく蔣氏の今後に於ける態度を見極めたる上ならでは、之と事を共にするは、寧ろ危険であると考へるものである」<sup>(76)</sup>。

さらに、北伐戦争を始めた蒋介石に対し、中国国民党左派と中国共産党が武漢に国民政府を設けて、蒋介石の軍事独裁を牽制し、蒋介石も南京に国民政府を置いて武漢側と対抗すると、水野は、「惟ふに諸君は、同じく

---

(72) 水野生「時事評論」、1924年9月20日執筆、『支那時報』第1巻第1号、支那時報社、1924年10月、巻頭辞。

(73) 張憲文等『中華民國史(第一巻)』、南京大学出版社、2006年、522頁。

(74) 「排外罷業の根本解決策」、『支那時報』第3巻第1号、支那時報社、1925年7月、巻頭辞。同稿は無記名であるが、同書巻頭辞は毎号すべて水野が執筆している(田中清「水野梅曉追憶記」、前掲『水野梅曉追憶録』、58頁)。

(75) 前掲『中国近現代史 上巻』、309頁。

(76) 水野梅曉「国民党の左右両系」、『支那時報』第5巻第5号、支那時報社、1926年11月、巻頭辞。



故孫総理の三民主義の信徒である以上は、其の広西派たると、広東派たると、將た武漢派たると、南京派たるを問はず、等しく孫総理の一身より出でたる、豆と菁との如く、兩根の生たる間柄ではないか」と、中国共産党との関係をめぐって内部分裂した中国国民党を非難した。

中国国民党に対する水野の厳しい目は、1928年12月に国民革命軍が北伐戦争を終えて中国を統一して以後も変わることがなかった。1929年11月、水野は「同情すべき支那の人民」を執筆し、「革命党の領袖は容易に反革命の分子を除去すること能はずして、終に十有七年の永きに亘りたるも、人民は心から革命の完成を祈り、之が為には軍費の負担は固より、其身命までも犠牲に供したるは、世人一般の周知せる通りであつた」<sup>(77)</sup>と、革命の遂行によって中国民衆に大きな負担を強いた中国国民党を非難した。

さらに、水野は、「軍政期は変じて訓政期となり、革命の為に要したる大兵は、速かに之を裁撤すると云ふ機運となるや、広西派の叛乱に繼ぐに馮氏の挙兵となり、今や戦禍は更に両広に弥漫するに至りて、人民は安居樂業の日を知らぬこととなつたのは、誠に同情に堪へない」<sup>(78)</sup>と、中国統一を果たしたにも拘わらず、民衆を戦乱から救い出せなかった国民党や国民政府に失望の念を示した。

### III 東洋文化の精神復活と中国仏教界の反発

満洲事変を日本の満洲権益のためであり、軍閥や革命運動に翻弄された中国のためであると正当化した水野は、その後誕生した満洲国をどう評価したのか。そして、なぜ日満の文化交流に係わるようになったのか。

1931年9月18日、満洲事変を起こした関東軍は、およそ4ヶ月半で満洲全域をほぼ占領し終わると、満洲新国家樹立を急いだ。1932年2月17日、関東軍は張作霖の旧部下で、黒龍江省長の張景恵を委員長とする東北行政委員会を発足させると、翌18日、同委員会に満洲の独立を宣言させた。

(77) 「同情すべき支那の人民」、1929年11月24日執筆、『支那時報』第11巻第6号、1929年12月、支那時報社、巻頭辞。

(78) 同上、巻頭辞。

さらに、3月1日、張景恵によって満洲国の建国宣言が発表された<sup>(79)</sup>。

宣言の中で張は、中華民国成立以降の軍閥による騒乱や、中国国民党の専制政治、中国共産党による共産主義思想の浸透などを批判したうえで、今後、満洲国は、「王道主義ヲ実行シ、(引用者略)東亜永久ノ光榮ヲ保チテ世界政治ノ模範ト為サム」<sup>(80)</sup>と、儒教思想を政治の基本理念とすると述べた。また、3月9日に長春市政公署で開かれた執政就任式典でも、満洲国の指導者となった溥儀の横で、國務総理の鄭孝胥が、満洲国執政宣言を代読し、「今吾国ヲ立ツ、道德仁愛ヲ以テ主ト為シ、種族之見國際之争ヲ除去セム」<sup>(81)</sup>と、儒教でもっとも重要とされた「仁愛」(仁)を実現していくことを主張した。

満洲国が基本理念として儒教を全面的に押し出した目的は、関東軍の占領下にあったものの、中華民国の主権下にあった満洲に、国家として存在するために必要な正統性を主張することであった<sup>(82)</sup>。満洲国にとって、儒教は、正統性を保証し、かつ中華民国の国是である三民主義と対抗できるほぼ唯一の思想であったといえる。

満洲国の成立を受けて、水野は3月25日、「満洲国の出現と我等の待望」を執筆し、満洲国誕生の意義を次のように評価した。

(中華民国が一引用者注)「要するに東方文化の神髓たる『孝悌忠信』『礼儀廉恥』の精神を没却し、一にも排他、二にも排他を以て能事と為し、内省を事とせざりし結果なれば、新たに産まれたる新国家は、其の元号に示せるが如く、真実なる『大同』の治を行ふて、将きに其の本土に於て失はれんとする東方文化の精神を復活して、独り満蒙の民衆を救ふのみならず、延ひては四億の民衆を救済せられんことを待望するものである」<sup>(83)</sup>。

これまで軍閥の争乱や国共合作による混乱によって、中国の行く末を案じていた水野は、満洲国の誕生が中国民衆を救済する機会を与えるだけでなく、キリスト教の浸透や長い戦乱によって危機に瀕していた「中国のア

---

(79) 江口圭一『昭和の歴史 第4巻 十五年戦争』、小学館、1982年、136～137頁。

(80) 満洲国史編纂刊行会『満洲国史 総論』、満蒙同胞援護会、1970年、221頁。

(81) 同上、211頁。

(82) 山室信一『キメラ—満洲国の肖像』、中央公論社、1997年(第5版)、125頁。

(83) 水野梅暁「満洲国の出現と我等の待望」、『支那時報』第16巻第4号、支那時報社、1932年1月、巻頭辞。

イデンティティーたるその文化」(東洋文化)を守り、そして、復興のきつかけとなることを期待した。

では、水野は満洲国で東洋文化を復活させるためにどのような行動をとったのか。1933年3月14日、大連行きの客船「バイカル丸」に乗船していた水野は、「満洲事変の文化的意義」を執筆した。このなかで水野は、満洲事変の際、日本側が「此の事件に依りて東方古文化の精髓たる古書の散逸を恐れ、極力之が蒐集に力を用ひて」<sup>(84)</sup>いたにも拘わらず、満洲事変に対する人々の関心は経済に向けられ、文化的意義については論じられなかったと指摘した。そして、水野は日本側によって守られた奉天にあった『四庫全書』や満漢両文の『清実録』などをひとつひとつ点検しながら、「満洲事件に依りて齎らされたる我国の文化事業の一斑を世人に紹介せんと欲し、筆を載せて新興満洲国に入らんとする」<sup>(85)</sup>と、自らが満洲国で文化交流に携わる決意を述べた。

満洲に渡った水野が計画した案は、「国立図書館」の設立と、『四庫全書』や『清実録』といった満洲国にあった古典籍や美術品の保存、古建築の保存と修繕、そして、東方文化発揚のための機関の設立であった。そして、日満双方の関係者の協力を受けて、10月16日、日満文化協会が発足した<sup>(86)</sup>。

一方、これまで水野とともに中国仏教の復興に心血を注いできた太虚は、満洲事変をどうみていたのか。

満洲事変発生後まもなく、太虚は「為瀋陽事件告台湾朝鮮日本四千万仏教民衆書」(「瀋陽事件について、朝鮮、台湾、日本の四千万人の仏教徒に告げる書」)を発表した。このなかで太虚は、これまでアジアへの欧米の文化侵略に対し、仏教国のインド、中国(中華)、日本の民衆が団結して助け合ってきたにも拘わらず、日本が満洲を占領し、満洲国に独立を宣言させたことは、「十悪五逆」に値すると述べた<sup>(87)</sup>。「十悪五逆」とは、人間のすべての業(行為)のうち、悪とされた殺生、偷盗、邪淫の「身三」、

(84) 水野梅暁「満洲事件の文化的意義」、『支那時報』第18巻第4号、支那時報社、1933年4月、巻頭辞。

(85) 同上、巻頭辞。

(86) 前掲「水野梅暁と日満文化協会」、『仏教史研究』第38号、61頁。

(87) 釈印順編著『太虚法師年譜』、宗教文化出版社、1995年、180～181頁。

妄語、綺語、悪口、両舌の「口四」、貪欲、瞋恚（怒り憎むこと）、愚痴の「意三」の「十悪」と、極悪な行為とされた母親を殺すこと、父親を殺すこと、聖者を殺すこと、仏を傷つけること、教団を破壊することの「五逆」を合わせた仏教思想で、これらを犯すと地獄に落ちるとされた<sup>(88)</sup>。

この宣言は、太虚にとってこれ以上ない日本の中国侵略に対しての厳しい批判であり、また、満洲国を通して中国の文化を守り復興させようとした水野への異議申し立てであった。

## まとめ

水野梅曉の生い立ちから、日満文化協会を設立して日満文化の交流に係わるまでの経緯をたどりながら、なぜ日中仏教交流を果たした水野が、日本の中国侵略を支持したのか、その考えの変遷をたどった。

高見祖厚と根津一から薫陶を受けた水野は、開教師として渡った長沙で若い学僧に教育を施したり、知識人や革命人士らとの交流を図るなど、仏教の普及に努めた。水野にとって長沙での経験は、仏教が中国のアイデンティティーを形成する文化であることを認識させた。

水野が目指したのは、日本と中国が仏教を通して提携し、衰退の一途をたどっていた中国仏教を復興させることであった。しかし、水野が目当たりしたのは、布教権をたてに中国内陸部へ進出するキリスト教宣教師の姿であった。キリスト教の影響力の拡大は、仏教だけでなく、仏教とともに中国社会に深く根づいていた儒教文化の破壊にもつながった。

水野は日本仏教が布教権を獲得すれば、キリスト教宣教師と地位を同じくできると主張した。そして、辛亥革命で革命派を支持することで、将来できあがる革命派の新国家で日本仏教に布教権が与えられることを期待した。

しかし、新しく誕生した中華民国は、軍閥の争乱が激しく、革命運動により民衆は大きな負担を強いられた。水野は中国仏教の復興の試みとして、太虚ら中国側仏教徒らと東亜仏教大会を開き、日中仏教の提携を図った。

---

(88) 中村元・福永光司・田村芳朗・今野達編『岩波仏教辞典』、岩波書店、1989年、4頁。

このような状況のなかで起きたのが満洲事変であった。水野は関東軍が奉天軍閥を破って満洲を占領することは、日本のためはもとより、中国民衆のためでもあると主張した。さらに、儒教を建国理念とした満洲国を中国文化復興の新たな拠点とし、日満文化協会を創設して、満洲に遺された文物の保存と公開を始めた。水野とともに日中仏教の交流に努めた太虚は、満洲事変が起きると、日本側の行動を「十悪五逆」とみなして、痛烈に批判した。

水野梅暁を日中友好の先駆者と見るか、あるいは日本の中国侵略を支持した人物と見るか。これら評価はいずれも水野の一面を示していることには違いない。しかし、水野が長年の希望であった中国文化の復興を実現するために、太虚が「十悪五逆」とまで批判した満洲事変を支持したことは、歴史的観点から見て、明らかな誤りであったことは指摘しなければならない。

## 参考文献一覧

- Xue Yu (2005) *Buddhism, War, and Nationalism, Chinese Monks in the Struggle against Japanese Aggressions, 1931–1945*, Routledge.
- 「排外罷業の根本解決策」(1925)、『支那時報』第3巻第1号、支那時報社、巻頭辞。
- 「同情すべき支那の人民」(1929)、『支那時報』第11巻第6号、支那時報社、巻頭辞。
- 「学僧・日中友好の先駆者 水野梅暁(1)」(1984)、大学史編纂委員会編『東亜同文書院大学史—創立八十周年記念誌一』、滬友会、370～371頁。
- 海原宏文(1974)「水野梅暁師と私」、松田江畔編『水野梅暁追懐録』、私家版、31～48頁。
- 江口圭一(1982)『十五年戦争』昭和の歴史 第4巻、小学館。
- 太田外世雄(1984)「水野梅暁師への思い出」、松田江畔編『水野梅暁追懐録』、私家版、16～25頁。
- 仰止生(1926)「精進院根津一先生」、『支那時報』第4巻第1号、支那時報社、100～111頁。
- 栗田尚弥(1993)『上海 東亜同文書院一日中を架けんとした男たち一』、新人物往来社。

- 小島毅 (2013) 『朱子学と陽明学』、筑摩書房。
- 呉利明・鄭兪玉・閔庚培・土肥昭夫 (1995) 『アジア・キリスト教史(1)—中国、台湾、韓国、日本—』、教文館。
- 柴田幹夫 (2001) 「水野梅暁と日満文化協会」、『仏教史研究』第38号、龍谷大学仏教史研究会、46～69頁。
- 釈印順編著 (1995) 『太虚法師年譜』、宗教文化出版社。
- 蕭平 (2003) 『近代中国仏教的復興』、広東人民出版社。
- 末木文美士・辻村志のぶ (2011) 「戦争と仏教」、末木文美士編『近代国家と仏教』新アジア仏教史14 日本IV、俊成出版社。
- 竹内照夫 (2014) 『四書五経入門』、平凡社。
- 田中清 (1974) 「水野梅暁追憶記」、松田江畔編『水野梅暁追懐録』、私家版、56～68頁。
- 張憲文等 (2006) 『中華民国史 (第一卷)』、南京大学出版社。
- 槻木瑞生 (1991) 「大陸布教と教育活動—日中戦争下の日語学校覚書」、『同朋大学論叢』第64・65号、同朋学会。
- 中村隆英 (2012) 『昭和史 (上)』、東洋経済新報社。
- 中村義 (1986) 「水野梅暁在清日記」、『辛亥革命研究』第6号、辛亥革命研究会、99～131頁。
- 中村元・福永光司・田村芳朗・今野達編 (1989) 『岩波仏教辞典』、岩波書店。
- 新野和暢 (2014) 『皇道仏教と大陸布教—十五年戦争期の宗教と国家』、社会評論社。
- 根津一 (1997) 「対露主戦論」、東亜同文書院渥友同窓会編『伝記叢書243 山洲根津先生伝』、大空社。
- 姫田光義・阿部治平・笠原十九司・小島淑男・高橋孝助・前田利昭編 (1983) 『中国近現代史 上巻』、東京大学出版会。
- ブライアン・アンドルー・ヴィクトリア (2001) 『禅と戦争』、エイミー・ルイーザ・ツジモト訳、光人社。
- 松田江畔 (1974) 「編者メモ」、松田江畔編『水野梅暁追懐録』、私家版、135～145頁。
- 満洲国史編纂刊行会 (1970) 『満洲国史 総論』、満蒙同胞援護会。
- 水野梅暁 (1902) 「天童参拜日記」、高田道見編『天童小誌』、仏教館、33～63頁。
- 水野梅暁 (1905) 「湖南仏教視察報告」、安井正太郎編著『湖南』、博文館、567～624頁。

- 水野梅暁（1915）『支那に於ける欧米の傳道政策』、仏教徒有志大会。
- 水野梅暁（1916）「支那刻下の動乱と列国の利害關係」、『欧洲戦争実記』第51号、博文館、61～68頁。
- 水野梅暁（1924）「時事評論」、『支那時報』第1巻第1号、支那時報社、2～3頁。
- 水野梅暁（1926）『支那仏教の現状に就て』、支那時報社。
- 水野梅暁（1926）「国民党の左右両系」、『支那時報』第5巻第5号、支那時報社、巻頭辞。
- 水野梅暁（1927）「大局上より張氏の下野を高調す」、『支那時報』第7巻第1号、支那時報社、2～8頁。
- 水野梅暁（1932）「支那時局解説」、『支那時報』第16巻第1号、支那時報社。
- 水野梅暁（1932）「満洲国の出現と我等の待望」、『支那時報』第16巻第4号、支那時報社、巻頭辞。
- 水野梅暁（1933）「満洲事件の文化的意義」、『支那時報』第18巻第4号、支那時報社、巻頭辞。
- 水野梅暁（1973）「護国論」、小川平吉文書研究会編『小川平吉関係文書2』、みすず書房。
- 峯玄光編（1926）『東亜仏教大会紀要』、仏教聯合会。
- 森田清之助（1920）森田清之助編『光悦談叢』、芸艸堂。
- 山室信一（1997）『キメラ—満洲国の肖像』、中央公論社。
- 山本勇吉（1974）「雁魚」、松田江畔編『水野梅暁追懷録』、私家版、74～76頁。
- 横山宏章（1997）『中華民国』、中央公論社。

Summary

## **Japanese Invasion of China and Baigyō Mizuno**

HIRONAKA Issei

This paper examines reasons that Baigyō Mizuno, between the years of 1920 and 1940, working as a successful journalist of Chinese affairs and contributing to the friendship of Japanese and Chinese Buddhism as a Jodoshinshu Honganji Buddhist monk, supported the Japanese Army's invasion of China after the Manchurian Incident.

The young Mizuno pursued the study of Zen Buddhism and Confucianism and continued his training in China. While there, he faced the realization that the permeation of Christianity was endangering the Chinese identity shaped by Buddhism. Mizuno published articles in the newspaper and magazines pointing out the problems of religious propagation and simultaneously supported the Chinese revolution in order to be permitted to teach Japanese Buddhism with the goal to rebuild Chinese Buddhism. However, the upheaval caused by the Chinese Revolution not only endangered the Chinese people but also the cultural treasures of ancient China.

Influenced by his teacher Hajime Nezu, Mizuno had great concern regarding the Japan's Special Interests in Manchuria and was dissatisfied with the governance by Zhang Zuolin, the leader of Mukden military clan. He also harshly criticized the Nationalist Party and its government for struggling against the Chinese Communist Party and not being able to suppress the chaos happening in China.

These criticisms of and dissatisfaction with Chinese affairs caused him to support the war.